

がたつことは一般的である。

(注4) ここで言う補文は、[NP S ノ/コト] のような補文標識をとるような埋め込み文のことを指し、[NP S N] のような連体修飾構造の埋め込み文のことは指さないことにする。なお、「ノ」「コト」を補文標識とすることには問題があるが、本稿では「ノ」「コト」を補文標識 (Comp) として一括して示す。

(注5) ただし、徳川・宮島1972に、

「～のを」のかたちの目的語でも、「むこうからくるのを(大きいのを)さける(よける)」のように「ものを」の意味のときは、両方便えるが、「ぶつかるのをさける」のように「ことを」の意味では「さける」だけが使われる。

(p. 407)

と指摘されているように、「よける」でもヲ格に「Sノ」をとることがあるが、この場合の「ノ」はCompではなく、名詞であると考え。また、[NP S Comp] は [+ abstract] という素性を持つが、「大きい」のような [NP S N] は [- abstract] という素性を持つ。したがって、「さける」は、ヲ格に [+ abstract] という素性を持つ名詞句をとる

ことができるため、ヲ格に [NP S Comp] をとることができるが、「よける」は、ヲ格に [+ abstract] という素性を持つ名詞句をとることができないため、ヲ格に [NP S Comp] をとることができないと考えられる。

(注6) 「さける」あるいは「よける」行為を及ぼすものを「主体」、及ぼされるものを「対象」と呼ぶことにする。

(注7) 「抽象物」とは、[+ abstract] という素性を持つ名詞句の指示物 (referent) を示す。

(注8) ただし、(50)を(50')のような文から変形によって派生しようという意図はない。

(注9) '←' は、右辺によって左辺が表わされることを示す。

(注10) これは、本稿で言うように、ヲ格に補文をとらない場合でも、「さける」行為の対象がある事態であることを示していると思われる。

言語経歴：1958年11月 東京都豊島区生 3

歳—埼玉県朝霞市

(東京都立大学学生)

サケル・ヨケル

鈴木正行

拙稿では、動詞「サケル」と「ヨケル」の意味の違いについて論じたい。

例えば体育の時間などであらぬ方向から友人に向かってボールがとんできたとすれば、「あぶない、よけろ！」

と、その友人に警告の言葉を叫ぶであろう。これを決して「さけろ！」とは言わないはずである。

また「芸術と実生活との相剋は避けがたい宿命であった。」という文で、形容詞「避けがたい」を「よけがたい」に置き換えることはできない。

このように使い分けられる理由はどこにあるのだろうか。今ここで漠然と感じるものを述べることは差し控えたいが、その〈言語直感〉は常に胸に抱きながら論をすすめたい。

論をすすめる手順として、まず『ことばの意味1』(平凡社選書47・柴田武編)に所載された長嶋善郎氏の論を紹介し、それを批判し、そして止揚する形で自己の論を述べたい。

1. 長嶋善郎氏の論

〈共通点〉

いずれも何らかの対象物との接触を回避することを表わす動詞であり、「…をサケル」「…をヨケル」という形で用いられる。

〈基本的相違点〉

①目に見える、形のある具体物(人間を含む)が対象である場合、サケル・ヨケルのいずれを用いることもできる。(以下傍点筆者)

例7 a 暗礁をサケル

b 暗礁をヨケル

8 a 自動車をサケル

b 自動車をヨケル

10 a 子どもをサケル

b 子どもをヨケル

①具体的な対象物であっても物理的な接触と具体的

な動きを示す文脈では、ヨケルは使えるが、サケルは使えない。

例11 a *船は間一髪のところでは暗礁をサケタ

12 a *彼は体をかわして自動車をサケタ

14 a *自動車は横丁から走り出た子どもをころうじてサケタ

①動詞で表わされる事柄を対象とする文脈では、サケルは使えても、ヨケルは使えない。

例15 a 暗礁にぶつかるのをサケル

b *暗礁にぶつかるのをヨケル

16 a 自動車を運転するのをサケル

b *自動車を運転するのをヨケル

18 a 子どもにつき会うのをサケル

b *子どもにつき会うのをヨケル

尚、文例7・8・10の具体物を対象とするサケルの各文の意味は、15・16・18に示されるような内容である。つまりその具体物との接触（関わり）を持つことを回避するということである。

②状況や事柄などの抽象物が対象となる場合、サケルは使えるが、ヨケルは使えない。

例1 a 人込みをサケル

b *人込みをヨケル

2 a 酷暑をサケル

b *酷暑をヨケル

3 a 人目をサケル

b *人目をヨケル

5 a 明言をサケル

b *明言をヨケル

以上①(①①)・②より、サケルは〈抽象物あるいは具体物との何らかの関わりを持つこと〉を回避することであるのに対し、ヨケルは〈具体物そのものとの接触〉を回避することを示す。

《前提・留意点》

サケル④。行為主体は対象物の存在を予め知っていること

⑤。行為主体は対象物との何らかの接触・関わりを持つことを好ましくなくすること

ヨケル③。瞬間的な動きによって回避すること

①。対象物が主体に向かって動いてくること、さらにこの対象物を回避しなければ主体に何らかの害が及ぶこと

ここで長嶋氏の考察した文例は省くが、以上が長嶋

氏の論の要約である。

2. 長嶋論批判に対する自論

長嶋氏が両者の「共通点」を指摘しているが、その点には異論はない。

また長嶋氏がサケル・ヨケルの違いを考察するために掲げた1～26の文例も適切であり評価したい。

だが、まず全体的な批判を述べるなら、文例1～18を考察して導き出した「基本的相違点」と文例19～26を考察して導き出した「前提・留意点」との間に何らの論理的因果関係のないことである。おそらく「基本的相違」は「前提」の相違を意味づけるものでなければならぬのだが、長嶋氏はまず「基本的相違点」を指摘し、続いて「別の観点から探ってみよう」と断わって「前提・留意点」を述べている。具体的に言えば、抽象物を対象としてとるか否か、という「基本的相違点」によって、行為主体は対象物の存在を予知しているか否か、という「前提」の相違は説明づけられないのである。

問題なのは、文例を考察する長嶋氏の視点の置きどころである。まず文例を別の視点から再検討して、本質的な意味の相違を押さえることが必要である。

ところで、長嶋氏は「動詞で表わされる事柄を対象とする文脈ではサケルは使えてもヨケルは使えない」と述べている点を検討したい。

例えば、

猛牛の突進するのをヨケル

打球のとんでくるのをヨケル

という文例は考えられる。とすれば、ヨケルも「動詞で表わされる事柄」を対象とすることができる。さて「事柄」というのは長嶋氏の言葉を借りて言えば「抽象物」と呼ぶことができよう。するとヨケルも「抽象物」を対象としてとることができることになる。

また、

猛牛の突進をヨケル

という文例も可能と思われるが、「突進」とは「具体物」か、「抽象物」か。長嶋氏の「抽象物」の規定は「状況や事柄」という曖昧なものであるのだが、ここで「突進」は「抽象物」ということになろう。となれば、先の文例は長嶋氏の述べる「基本的相違点」に対する反証となり、ヨケルもまた抽象物を対象としてとることができることになる。

そして、長嶋氏はサケルは対象物との「何らかの関わりを持つこと」の回避であり、ヨケルは対象物「そ

のものととの接触」の回避である、と述べるが、「関わり」「接触」という表現にも再考の余地があると思われる。

それでは、サケル・ヨケルのそれぞれの対象物に着目しながら、別の観点から両者の相違を論じてみたい。「子ども」を対象として、

例10 a. 私は子どもをサケル

b. 私は子どもをヨケル

という文例について考えてみたい。

10 a の文例は、長嶋氏も述べる様に、その示す意味内容は「私は子どもにつき会^うのをサケル」ということである。あるいは別のある文脈を想定すれば「私は子どもを行^かせるのをサケル」「私は子どもと出^かけるのをサケル」「私は子どもを選^ぶのをサケル」「私は子どもを殺^すのをサケル」などの意味にとることも可能である。

ここで注目したいのは、動詞サケルはサケルの行為主体「私」以外の人物・「子ども」を対象語としてとってはいるのだが、サケルの対象となっていることの意味は、「つき会う」こと・「行かせる」こと・「選ぶ」こと・「殺す」ことであり、これらは悉く行為主体「私」の行為である、という点である。

要するに、サケルの行為主体をAとすれば、

Aは〔Aが〕〔Bを・に・へ・と・から・で〕

（——すること）をサケル

という構文をとる。

顕在化する部分は二重括弧（ ）内の前半部の格助詞を除いた部分だけの場合もあれば、後半部だけの場合もあれば、二重括弧内全部の場合もある。ただしサケル対象は「AがBを・に・へ・と・から・で——すること」なのである。

即ち、行為主体A自身の行為が対象語の意味なのである。

従って、

私は自動車をサケル

私は運転（すること）をサケル

私は自動車を運転することをサケル

という三つの文例は、対象語こそ違え、〈私自身の、車を運転する行為〉の回避という意味内容において一致する。

例7 a. 暗礁をサケル

9 a. 水溜りをサケル

この二文の意味は、「暗礁」「水溜り」という具体的な存在物との点対点的な物理的な接触を回避することを

示すものではなくて、

暗礁にぶ^つか^ることをサケル

水溜りに落^ちることをサケル

という行為主体の「ぶつかる」「落ちる」行為の回避を示すことである。

サケルの対象が行為主体の行為であるなら、

私は勉強をサケル

私は運動をサケル

のような文例で、

私は私が勉強することをサケル

私は私が運動することをサケル

という意味を示すことができ、この場合には「私」以外の具体的な存在物を対象として必要としない。ここで「具体的な存在物」とは目に見え、手に触れることのできる姿・形を備えたもの、という意味である。

例1 a. 人込みをサケル

2 a. 酷暑をサケル

6 a. いざこざをサケル

これらの「人込み」「酷暑」「いざこざ」等の非具体的存在物を対象とする文例でも、それぞれの意味が、

1' a. 人込み（に巻きこまれること）をサケル

2' a. 酷暑（に苦しむこと）をサケル

6' a. いざこざ（を起こすこと）をサケル

という様に行為主体の行為の回避を示すが故にサケルが用いられるのである。

一方、ヨケルの場合はどうであろうか。

子どもをヨケル

の文例では、行為主体が行為主体以外の「子ども」という具体的存在との点対点的な物理的接触を回避することが、その意味である。

動詞で表わされる事柄を文例にしてみる。

私は子どもの突進をヨケル

私は子どもの走ってくるのをヨケル

これらの文例で、「突進」するもの・「走ってくる」ものは「子ども」であり、「私」ではない。

例7 a. 暗礁をヨケル

8 a. 自動車をヨケル

24. 飛んでくる石をヨケル

24'. 石が飛んでくるのをヨケル

これらの文例は、具体的対象物、あるいは具体的対象物の行為との接触・衝突の回避が示されている。

サケルでは行為主体の行為が回避する対象であり、具体的存在物を対象語としてとったとしてもその意味内容はやはり行為主体の行為であった。それに対して、

ヨケルでは回避する対象は行為主体以外の具体的存在物そのもの、あるいはその存在物の行為である。従ってヨケルを用いた文には行為主体以外の具体的存在物は不可欠のものである。またヨケルは行為主体自身の行為を対象とすることはできないのである。

それぞれの回避の対象に焦点を当てた場合、次のことがサケルとヨケルの決定的な相違である。

サケル＝行為主体の何らかの行為の回避

○ (AはAが—することをサケル)

× (AはBが—することをサケル)

ヨケル＝行為主体以外の具体的存在物との接触の回避

○ (AはB [が—するの] をヨケル)

× (AはAが—することをヨケル)

さて対象の相違の問題から話をすすめたい。

サケルは行為主体の行為を自ら回避することであるのだから、それは意志的・自覚的行為であるといえよう。従ってサケル行為を実現するためには、主体の意志・自覚が働くための条件と余裕がなければならない。例えば、

例5 a. 明言をサケル

といった場合、主体はある状況において「明言すること」を頭の中に思いつき、それが状況にどのような影響を及ぼすかを十分に自覚したのちに自ら判断をくだして「明言すること」を回避するのである。その条件として、明言すればどうなるかを予め知っていなければならない。

例7 a. 暗礁をサケル

という場合でも、主体は「暗礁にぶつかること」を予測し、それを不利益と判断して意識的に回避することを意味する。

そこに時間的・空間的距離があって主体が判断をする十分な余裕のある場合もある。また、「とっさにサケル」という場合では短い時間の中でも主体はその行為の影響を予測し、判断し、意識的に回避すると思われる。

一方、ヨケル行為は、主体の外に存在する具体的存在物と点対点的な接触・衝突の回避が基本的要件であるから、対象物の方からにして、主体の方からにして、あるいは双方共にして、対象物と主体との距離は接近する関係にある。この点については長嶋氏が指摘する通りである。

例10 b. 猛スピードで走る車はかろうじて子どもをヨケタ

24. 警官は飛んで来る石を楯でヨケタ

25. 具志堅は強力なアッパーカットをヨケタ

対象物と主体との関係は接近しようとする傾向にあり、そして主体は対象と衝突・接触する直前あるいは瞬間に主体自身の位置を移動させて接触を回避する。勿論、主体は対象を知覚しているが、ヨケルという動作はサケルのような自覚的なものでなく、むしろ反射的・本能的なものであるといえよう。

また、サケルは実現以前の行為、頭の中に思い浮かべた観念的なものを回避するのであり、それを示す主体の具体的な行為は様々に解釈できる。例えば、

友人とつきあうのをサケル

といえば、学校をずる休みすることかもしれない、また休み時間にひとりで本を読んでいることかもしれない。それは文脈中で判断するしかない。あるいは、

明言をサケル

といえば、何もしゃべらない、黙っている、という非行為がサケル行為を具体的に示すことになる。

サケル行為は主体の思い浮かべた観念的なものを対象として、それを回避することであるから、内面的・心理的行為であり、それを示す具体的動作はその状況に応じて様々な形をとって現われる。

それに対してヨケルは主体以外の具体的存在物を対象として、それとの物理的接触を回避することである。

走って来る友人をヨケル

といえば、その具体的動作は脳へ位置を移動する行為で統一される。ヨケルという行為の示す具体的な動作はほぼ一致する、即ち、主体の動く軌動上には必ず対象があって（あるいは逆に対象の動く軌動上に必ず主体があって）主体と対象とは線的に結ばれているのだが、ヨケルとは主体が対象との衝突以前にその軌動上から位置をずらすという行為である。ヨケルは外面的・具体的行為であり、その動作はほぼ共通する性格を持つ。

それぞれの否定形、サケラレナイとヨケラレナイとを較べてみたい。

●地球は、二千何年、彗星と撃突することはもはやサケラレナイ

●この一本道を行けば、彼女と出会うのはサケラレナイ

●猛スピードで接近する車をヨケラレナイ

●この距離では前方のミサイルをヨケラレナイ

「サケラレナイ」には運命的・必然的な接触が感じられる。これはサケルが主体の意志的行為であるから、

その打消であるサケラレナイにはもはや主体の意志の働かない状態、主体の意志ではどうしようもない状態を示すものである。それが運命的・必然的の感を与えるのであろう。

ヨケラレナイには時間的・空間的余裕がない、能力的には不可能である、という印象を受ける。これは本能的・反射的な動作であるヨケル行為を行えないというところから来るものであろう。

以上、サケルとヨケルの違いについて考察してみた。再一度まとめると以下の様である。

サケル＝行為主体の何らかの行為の回避

自覚的・意志的行為

ヨケル＝行為主体以外の具体的存在物との点対点的

接触・衝突の回避

本能的・反射的行為

《補足》

サケルは〈行為主体の行為の回避〉を示す動詞である、と述べてきたが、それに対する反証として、

私はこの絵が人目につくことをサケル

という文例を掲げることができるだろうか。「人目につく」という行為の主体は「私」ではないから、サケルは行為主体自身の行為の回避を示すのではないのではないか。しかし「人目につく」というのは「絵」が勝手に歩いて「人目につく」位置に行くのではなく、「私」が「絵」を動かして「人目につく」位置に置くことである。右の文例の意味は、「絵を人目につく位置に置くことをサケル」ということであり、依然としてサケルの対象は〈行為主体自身の行為〉であると考えられる。

(千葉大学学生)

参 考 文 献 一 覧

ここに掲げる参考文献は、本書の意味論関係の論文において各自が参照・引用したものを一括して、文献の著者の五十音順に並べたものである。著書・論文の内容により、ほとんどの者が参照しているものもあれ

ば、ただ一人だけが参照しているものもある。このようにまとめたのはあくまでも便宜の手段であって、御理解、御寛恕願いたい。

池上 嘉彦1975『意味論』大修館書店

〃 1977「意味の体系と分析」『岩波講座 日本語 9 語彙と意味』岩波書店

木川 行央1979「おす・おさえる・つく」『日本語研究 第2号』

国広 哲弥1967『構造的意味論』三省堂

〃 1968「意味論・語彙論」『文学・語学 第48号』

〃 1970『意味の諸相』三省堂

金田一京助他1981『新明解国語辞典 第三版』三省堂

国立国語研究所1964『分類語彙表』秀英出版

〃 1972『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

柴田 武編1976『ことばの意号 辞書に書いてないこと』平凡社

〃 1979『ことばの意味2 辞書に書いてないこと』平凡社

新村 出1976『広辞苑 第二版補訂版』岩波書店

田村 公男1980「おおう・かぶせる」『日本語研究 第3号』

徳川 宗賢1972『類義語辞典』東京堂出版

宮島 達夫1972『比喩表現辞典』角川書店

中村 明1977『比喩表現辞典』角川書店

西尾 実他編1979『岩波国語辞典 第三版』岩波書店

日本大辞典刊行会1972—76『日本国語大辞典』小学館

服部 貴義1980「つつむ・くるむ・くるめる」『日本語研究 第3号』

久松 潜一1974『改訂 新潮国語辞典』新潮社

平山 輝男編1979『全国方言基礎語彙の研究序説』明治書院

文化 庁1971『外国人のための基本語用例辞典 第二版』大蔵省印刷局

森田 良行1977『基礎日本語』角川書店

Fillmore, C. J. 1967 "The grammar of hitting and breaking." Working Papers in Linguistics 1.

〃 1968a "The case for case." Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.), Universals in Linguistic Theory.

〃 1968b "Lexical entries for verbs." Working Papers in Linguistics 2.

〃 1969c "Types of lexical information." Working Papers in Linguistics 2.

〃 1971 "Some problems for case grammar." Working Papeers in Linguistics 10.

(以上五編、田中春美・船城道雄訳『格文法の原理——言語の意味と構造——』三省堂(1975)所収)